

# シリア、イラン及びロシア 今後の展開

Halper and Associates

(2014年2月14日)

オバマとオランダ

今週ワシントンでオバマ大統領とフランスのオランダ大統領との会談が行われた。その後に関われた記者会見では、珍しく両大統領がシリア問題について苛立ちをあらわにした。そしてその場にいた者の多くがその苛立ちに気が付いた。両大統領は、シリアでは人道的危機が発生し、何百万人もが難民となり、化学兵器の廃棄が一向に進まないことを非難した。オバマ大統領はロシアの対応について強い不満を表した。

オランダ大統領が2013年にアサド政権に対して軍事力を行使するつもりであったことは、我々の記憶に新しい。軍事攻撃がイギリス議会と連邦議会の反対にあって頓挫したときにフランスが何もしなかったことで、フランスの右翼はオランダ大統領を非難した。フランス右翼、特にベルナルド・アンリ・レヴィ氏は、フランスが世界の中心的存在となり、米国に引けを取らない立場を得ることを熱望している。

イランについて：オバマとオランダはこの記者会見を利用して、イランの核開発プログラムに対する両国の強硬姿勢をあらためて表明した。具体的に言えば、許容する遠心分離機の数と濃縮レベルである。米国が許容する濃縮レベルは5%であるのに対して、イランは20%を主張している。両大統領は、核協議の進展が遅いことに苛立ちを表し、投資／輸出禁止措置に違

反する企業に対しては、直ちに厳しい処分を行うと警告した。

そうは言うものの、米仏両国はシリアとイランに関する協議が進展していることも理解している。シリアとイランの違いは、シリア問題に関する協議の進展は急務であり、オバマ政権は積極的に代替的アプローチを考えているということである。イランについて言えば、「当分の間米国の政策は過程である」と考えている者もワシントンのなかにはいる。イランについては、ある時点である程度妥協しなければならないことは分かっている（米国では、オバマ政権はそのような妥協の背景を報道機関に説明するとともに、両党の議会指導部とAPACに根回しをしている）。

ジュネーブにおけるシリア和平会議の状況

ジュネーブIIの決裂を受けて、外交政策団体の話題はシリア状況の悪化一色となった。

現在の状況：

ジュネーブ和平会議の第1ラウンドは1月22日から1月31日まで行われた。ホムスでの一時停戦については合意を見たが、意見の隔たりは大きく、非難の応酬のうちに協議を終了した。

和平会議の第2ラウンドは2月10日から15日まで開催された。最終日の土曜日、国連特使のラクダール・ブラヒミ氏は、シリア国民に対し

て交渉の失敗を謝罪した。和平交渉行き詰まりの大きな原因は、政府側が「暫定」政府に関する話し合いを拒否したことであった。

第3ラウンドに関しては、アジェンダは合意されたが「テロ」対策や「暫定政権」の問題についての合意には至らなかった。

米国、イギリス、フランスは、和平会議が決裂した責任はアサド政権側にあると非難した。2011年3月以来の内戦で10万人以上の命が奪われ、およそ950万人が住む家を追われた。反体制派側の人口密集地区（特にアレッポとホムス）への「タル爆弾」攻撃によって、3週間で5,000人が死亡して、政権に対する批判が世界中に広まった。

無防備な住民に対する「無差別」兵器の使用は、暫く静観していた米国をシリア問題に引き戻した。ただし米国がどう対処すべきかについては、依然として意見がまとまらない。アメリカ国民は、事態が悪化していることを理解しているが、地上戦に巻き込まれるようなことは望んでいない。したがって、シリアで人道的危機が発生していても、米国軍を投入するという可能性にまでは至らない。米国の世論と政治的感情は、米国が紛争への関与を深めることについて、明らかに反対している。米国民はオバマ大統領が経済政策に重点を置くことを望んでいる。

それでも、ジョン・マケインとリンゼイ・グラハムを始めとする共和党上院議員は、依然として「別の措置」を取ることを支持している。この措置とは、反体制派に武器を提供してアサド政権に圧力をかけるための特殊作戦である。

この作戦が進行中であることは、政策団体のなかでは周知の事実である。ただし、これはトルコ、ヨルダン、レバノンの当局からは暗黙の了解を得てはいるものの、いまだにオバマ政権の承認を得ていない。この取り組みには、「ステインガータイプ」の対空兵器を提供することも

含まれている。この兵器は、タル爆弾の主力輸送機であるヘリコプターを攻撃するためのものである。通常とは異なる設定に備えて、小隊戦闘訓練も提供している。

米国は通常、高度な対空兵器を供与することを躊躇する。これはISISやアルカイダなどの過激な反体制派組織の手に渡ったり、ヒズボラや革命防衛隊などイランの手先が入手することを恐れているからである。したがって、供与する兵器の種類と数量については、微妙な境界線が存在する。これは米国民のなかに広く存在する感情を反映している。すなわち、外国の紛争への関与に対する伝統的なためらいである。アメリカ人は以下のような歴史的事実を思い浮かべる。すなわち、「外国との面倒な関わり合い」についてのワシントンの警告；当時ドイツの攻撃に曝されていた英国への支援について明らかに迷っていた／躊躇していた1930年代後半のルーズベルト；トンキン湾における米国軍艦ターナージョイへの攻撃をジョンソンが捏造して、連邦議会の戦争決議を得たという事実；偽りの口実の下に米国をイラク戦争に駆り立てたブッシュ政権の偽装工作。

今でも戦略立案者にとっての最大の懸念は、ヨルダンとレバノンに攪乱効果を与える地域で起きている紛争の影響である。ヨルダンのアブドラ2世国王は、王国の治安の悪化状況と、シリアに関する米国とヨルダンの連携について協議するために、2月14日～15日オバマ大統領と共にカリフォルニアに滞在していた。

ロシア：ロシアのアサド政権擁護は、以下の戦略上の懸案事項が動機である。

(1) 地域におけるロシアの確固たる存在感を回復する。(2) タルトゥース海軍基地の使用を維持する。(3) コーカサス地域へ向けて北上するイスラム過激派と兵器の流れを遅らせる／止める。(4) ロシアと同盟関係にあるアサド政権を持

続させる。

現在ロシアがイランと共に、資金援助、軍事訓練、武器、アサド政権への政治的支援を提供しており、これからも提供し続けるであろうことは周知の事実である。

プーチン大統領がソチ・オリンピックに対する米国の対応を不満に思っていることについては、ワシントンがモスクワに抱く不満に関連して言及しておく必要がある。テロへの警戒感と米國務省からの公式な警告にもかかわらず、米国はオリンピックの公式代表団(選手ではない)のメンバーに複数の同性愛者を含めた。この目的は、米国はロシア政府が同性愛者に課した制限を受け入れないというメッセージをプーチンに送り、かつロシア政府のイメージを損なうことであった。残念ながら、「政治的正当性」が動機となったこの意思表示は、シリア問題の合意などさまざまな問題に対するプーチンの協力意欲に影をさしたように思われる。

問題は、モスクワに対する世界的批判を米国が集められるのかということである。果たして、自国の立場を変更すべきかどうかとモスクワが迷うほどの世界的批判を集めることができるのだろうか。それともモスクワは、米国が武力行使によって紛争に決着をつけようとしていると、世界世論を納得させるのだろうか。

## 今後の展望

ジュネーブIIの協議の行き詰まりは、確かに期待はずれではあるが、予想外の結果ではない。政府軍は、戦いを優位に進めており、現時点で譲歩しなければならないとは考えていない。ロシアはシリアに化学兵器を廃棄させる責任を担っている。ところが廃棄プロセスは、時としてモスクワが困惑するほど、遅々として進まない。

進め方の例として考えられるのは、1995年の Dayton 合意である。和平に向けたヨーロッパの取り組みが不調に終わり、米国もボスニア戦

争を終結させられないことが明らかになった。ボスニア戦争では何万人もが命を奪われ、数百万人もが住む家を奪われた。そしてクリントン政権初期の悩みの種でもあった。それにもかかわらず、Dayton 合意が行われた1995年の秋から、クリントンは自信にあふれる威厳あるリーダーとして浮上した。1995年の半年にも満たない期間に、クリントンは欧米の同盟関係を掌握して、圧倒的な軍事力を行使するようNATOに圧力をかけた。そして大胆な政治的賭けに出て米国の威信を危険にさらしたが、賭には勝った。

現在オバマ政権は、非正規軍をうまく利用することや政策を変更することについての潜在的利益を分析している。政策の変更とは、モスクワと再度連携してイランとロシアを含めた協議を行い、アサド政権の存続を認める代わりに、化学兵器の廃棄と穏健派反政府組織と和解することを求めるというものである。見通しでは、アサド自身がソチかどこか似たような場所にリタイアする。そして妥協政権が、サウジアラビアの反対を押しきって、権力を掌握する。奥地では混乱が続くだろうが、沿岸の主要都市は無傷のままである(戦闘が続くアンバールと、バグダードからバスラへの回廊地帯の状況に似ている)。クルド人はシリアを離れて、イラクのクルド人と共に、トルコの安全保障領域に拠点を移すであろう。Dayton がクリントンに恩恵をもたらしたような政治的結果を、オバマ大統領も期待している。

ジュネーブIIは失敗。終わりが見えない。国はこの戦いで疲弊している。

米国は力の限界を感じている。介入によって道徳的要請が実現できるのだろうか。

私たちに害が及ぶのか。国内では懸念が浮上。オバマは、シリアがレッドライン(越えてはならない一線)を越えたと述べた—議会は反対を唱えている。

これらすべては、SCSにおける米国の立場が目に見えるほど硬化しているさなかに起きた。

☆ ☆ ☆

**シリア和平協議：進展ないままの終了に、仲介役が申し訳ないと謝罪**

シリア和平協議の仲介役を務めるラクダール・ブラヒミ国連代表は、ジュネーブで開催された和平協議を進展のないまま終えた後で、シリア国民に申し訳ないと謝罪した。

ブラヒミ氏は、シリア政府と反体制派の行き詰まり状態を打破するために最後の望みをかけて、ジュネーブにおいて両陣営を交えた最終協議を開いた。

ブラヒミ氏は、行き詰まりの大きな原因の一つが移行期統治機関をめぐる話し合いをシリア政府が拒否したことにあると述べた。

和平協議第3ラウンドの日程は設定されていない。

イギリスとフランスは、協議が物別れに終わったのはアサド政権のせいだと非難している。

2011年3月に始まったシリアの内戦以来、10万人の国民の命が奪われている。

約950万人が家を追われ避難を余儀なくされている。

**疑念が持ち上がった**

土曜日の朝に開始された和平協議はわずか27分で終了した。協議終了後に記者会見に現れたブラヒミ氏の表情には疲労の色が見てとれたと、現地ジュネーブからBBCのイモジェン・フォークス記者は伝えた。

ブラヒミ氏はシリア国民に申し訳ないと謝罪し、和平協議が「大きな成果を挙げられなかった」ことを認めた。

両陣営は次回第3ラウンドの協議事項について合意しているが、ブラヒミ氏によれば、シリ

ア政府は暴力やテロの停止の議論に1日目を充て、暫定政権の議論に2日目を充てるブラヒミ氏の提案を拒否したという。

ブラヒミ氏は、シリア政府の態度が「同政府が“暫定政権に関する”議論を全くする気がない」という反体制派の疑念を招く結果となったと述べた。

ブラヒミ氏は、シリア政府が政治的解決の実現化に関する2012年ジュネーブ声明の実施について述べる際に、「同政府が、行政権を全面的に行行使する移行期統治機関を最大の目的に据える」ことを希望していると述べた。

しかし、シリア政府のバッシャール・アル・ジャーフアリ首席交渉官は、何よりも第一に「テロ」―反逆者の暴力―への対処が急務とされることを強調した。

「いったん議題を定めたら、いかなる解釈や誤った解釈も差し挟む余地も与えることなく、その協議事項を全面的に尊重すべきだ。我々は、協議事項1の検討を十分に行わないまま、なおかつこの協議事項に関する両陣営の共通のビジョンに基づいて他方の陣営が反対する事柄の結論を出さないまま、協議事項1から協議事項2、協議事項3または協議事項4へと移ることはできないと述べたはずだ」

反体制派のルーアイ・サフィ広報担当官は、シリア政府が拒否しているバッシャール・アル・アサド大統領を排除した暫定政権についての協議をまたしても強く主張したが、シリア政府はそれを拒否している。

「暫定政権について協議しない第3ラウンドは時間の無駄だ」とサフィ広報担当官は述べた。

ブラヒミ氏は、両陣営は和平プロセスを本当に進めたいのか「各陣営に戻って」、じっくり考え、協議する必要があると述べた。

和平協議破綻を受けて、イギリスのウィリアム・ヘイグ外務大臣はシリア政府を真っ向から非難したが、ジュネーブ・プロセスを継続して

いく必要があると述べた。

「道半ばにして、これで終わらせるわけにはいかない。シリアの内戦が毎日死者や破壊をもたらしているなか、我々はシリア国民に対して政治的解決に向かって前進するために全力を尽くす義務がある」

ヘイグ外務大臣は、イギリスも「シリア国内で困難を強いられている劣悪な人道状況」に対処するための国連安全保障理事会決議の推進を継続していくと述べた。

フランスのローラン・ファビウス外務大臣は、シリアの政治体制は「暫定政権樹立の進展を妨げ、一般市民に対する暴力やテロ行為を増幅させている」と述べた。

#### これまで以上に圧力をかける

これまでのところ、最新の交渉において結ばれた唯一の合意は、一般市民に包囲されたホムス市からの退去を許可し、同市への立ち入りを支援するというものだった。

特派員によれば、1月22日に開始したジュネーブ協議の第1ラウンド以降、少なくとも5,000人が死亡したとみられている。

米国のバラク・オバマ大統領は金曜日、アサド大統領にこれまで以上に圧力をかけるための手段を検討しているが、短期間においていかなる解決策も期待できないと述べた。

ヨルダンのアブドラ国王と首脳会談を行ったカリフォルニア州での講演のなかで、オバマ大統領は次のように述べた。

「アサド政権にこれまで以上に圧力をかけるために講じることでできる中期的な手段がいくつかあり、外交的解決を推し進める試みとしてすべての関係当事者との協力を継続していくつもりだ」

オバマ大統領は、どのような措置を検討しているのかについては明らかにしなかった。

#### 分析

BBC ニュース

イモジェン・フォークス記者

ジュネーブ発

ラクダール・ブラヒミ氏は忍耐強い、現実主義を貫く男性だ。しかし、わずか27分で終了した直接対談の後に記者会見に現れたブラヒミ氏の表情には疲労と落胆の色が見てとれた。

ブラヒミ氏は、両陣営を説得して和平協議第3ラウンドの日程について合意を取り付けることができると期待していたが、それはかなわなかった。

ブラヒミ氏の落胆の深さは、同氏がシリア政府と反体制派の「得意な話題」への頑なまでの執着について述べた際に、うかがい知ることができた。

反体制派は暫定政権について議論すべきだとする主張を崩さないのに対し、アサド政権は暴力とテロについての話し合いを要求している。

これらの二つの事柄についての主張がぶつかり合って、他の事柄——すなわち、シリア国民の不安を取り除く信頼醸成措置——についての協議も不可能となっている。

ブラヒミ氏は、アサド政権が暫定政権についての協議を嫌がっていることが障害になっていることを示唆し、和平協議の進展を報告する代わりに、シリア国民に謝罪する結果となった。

#### ジュネーブのシリア和平協議

- ・第1ラウンド：1月22～31日——痛烈な逆襲にあい終了するも、ホムスの停戦合意に達す。
- ・第2ラウンド：2月10～15日——仲介役を務めるラクバール・ブラヒミ国連代表が進展ないままの終了に対して謝罪、両陣営間の距離は依然縮まらず。
- ・第3ラウンド：協議事項はブラヒミ氏の提案に従うが、日程は未定。和平協議最大の障害

は“テロ”と暫定統治機関。

☆ ☆ ☆

### シリア：交渉は継続

シリアから伝わる情報は動かし難い厳しさであるが、まったく動きがない訳ではない。反体制派によると、ジュネーブ交渉が始まってから死亡者数は増加している。双方とも、勢力を拡大して、有利な状況で交渉に臨もうとしたためだ。民間人の避難（今のところ1,400人）と援助の提供は、休戦の間もホムスで継続されている。国連人道コーディネータによれば、「ささやかな一歩」だが、ホムスは、政府軍によって包囲されたままだ。レバノン国境のヤブルードは、政府軍の激しい空襲に晒されている。

3回目の化学兵器の積荷は、2月10日、国際護衛艦に護衛されて、ノルウェーの貨物船によって運び出された。化学兵器禁止機関(OPCW)と国連の合同査察団は、国内で一部の化学物質を破壊し、残りを国外に持ち出す作業が進展していることを歓迎する声明を発表したが、オペレーションは予定より遅れている。

ジュネーブ会議のシリア反体制派の代表団は、基本原則の声明を出したが、その声明は、バッシヤール・アル・アサド大統領について触れてもいないし、大統領の退任を呼びかけてもいなかった。声明は、ジュネーブI、シリアの当事者双方によって合意された政治的解決の実施と一時的に暫定的な統治機関を設置することを求めている。

国連／アラブ連合のラクダール・ブラヒミ代表は、2月13日、ロシア外務審議官及び米国国務次官との会談後、「ここでも、各国の首都でも、他のどこであっても、援助を差し伸べ、状況を打開することを約束した。(まだ)状況は、あまり前進していないからだ」とジュネーブで報道機関に述べた。交渉が失敗に終わる可能性

があるのかと質問されると、彼は、次のように答えた。

「失敗は、常に目の前に迫っている。国連に関する限り、我々は、前に進む可能性があれば、必ずあらゆる手段を尽くす。…シリアは、暗いトンネルの中に入っているが、これらの試みは、トンネルの出口を示す一点の光だ」。交渉の基本は、暫定政府に自由で公正な選挙を行うことを呼びかける、2012年ジュネーブ・コミュニケで採択されたすべての行動計画の実施である。当事者の間では信頼を回復するための新たな措置は協議されていないが、ブラヒミ氏は、国連は「ホムスで起こっている状況の改善にとっても興奮している」と述べた。ホムスでは、紛争当事者同士の3回目の停戦の延長が公表され、難民救済要員による現地で困難な状況下にある市民に対する援助活動ができるようになった。「しかし、まだ厄介で、恐ろしいことが起きている」と、彼は警告し、ホムスの国連人道要員とスタッフが、最近、街中でシリア赤新月社から激しい集中砲火を浴びたことを報告した。

「他の場所でも“人道支援”を提供したいが、もしそれができるとしても、我々のスタッフが生きて戻るのは奇跡でも起きない限り無理だろう」

西側主要国から提案されたシリアに関する安保理決議草案は、軍事侵略につながるとして、ロシアから激しく批判された。ロシアは、別の案を提案している。

レバノンの左翼新聞 Al-Akhbar (アル・アクバル) に掲載された下記のインタビュー記事について Conflicts Forum に感謝する。この記事は、数日前のものだが、シリアに対するイギリスの立場を明確にしている、例えば、ヒズボラについて、多少の考え方の違いはあるが、米国並びにより幅広く西側の立場を反映していると思われる。ヒズボラについては、イギリスはレバノンの合法的な政治勢力として受け入れて

いるが、米国は受け入れていない。

## インタビュー記事：イギリス特使は、シリアの 結末が最優先と述べる

Al-Akhbar 英語版, 2014年2月8日

間近に迫ってきた次回のジュネーブII会議の交渉に際して、Al-Akhbar は、バイルートを訪問中のイギリスのシリア特使、ジョン・ウィルクス氏にインタビューを行った。

2003年の米英による侵攻後のイラクのシナリオは、シリア反体制派に対処するイギリス特使の心に重くのしかかっている。彼は、イラクで犯した過ちを繰り返さないで、シリアの結末、軍及び制度を維持する必要性について話した。過激派との闘いが優先事項であり、したがって、シリアのアル・アサド大統領が退陣することが必要だ。ウィルクスによれば、西側は、シリア政権が継続することを望んでいるが、大統領については別だ。

Wafiq Qanso：ジュネーブIIの最初の交渉について、どう評価しますか？

John Wilkes：この交渉では大した進展がなかったことは事実ですが、関係者が同じテーブルに着き、全権を持つ暫定統治機構の設立、テロとの戦い、人道的状況、捕虜及びその他身柄を拘束されている者の交換などを含むすべてのセンシティブな問題が議論されました。これは重要なステップでしたが、これを足場として前進しなければなりません。

WQ：現政権はジュネーブIの文書を詳細に検討することを希望していますが、反体制派は、すぐにでも暫定統治機構の問題を取り上げたがっています。この難しい状況をどのように乗り越えて行けますか？

JW：ジュネーブIIは、暫定統治機構の設立、人

道的危機、テロとの戦いなどを含む、ジュネーブIのコミュニケに関連するすべての問題を議論するために召集されました。したがって、これらすべての問題を例外なく議論することが必要です。

私達の意見では、交渉の基本的かつ根本的な問題は、シリアの領土の統一性を保持することです。これまで1年以上にわたって軍事的膠着状態が続いています。現政権は特定の地域を支配し、反体制派はその他の地域を支配しています。クルド人は、東部にも北部にもいますし、イラクとシリアのイスラム国 (ISIS) は、一部の地域を支配しています。戦争が継続すると、シリアの分裂につながります。

ジュネーブ会議の基本的な目的の1つは、シリアを、地図に記載された状態の統一体として保全することです。したがって、ジュネーブの原則を拒否することは、それが誰であれ、事実上、国の分裂を推し進めることになります。ですから、私達は、現政権には、戦争の継続は人道主義の危機及びシリアの結末と地域の安定に対するネガティブな影響につながると言っていますし、反体制派には、軍事的解決などないと言っているのです。

WQ：反体制派と過激派を区別していますか？

JW：勿論です。公式見解によれば、現体制は、アルカイダと対立していますし、クルド人ともそうです。しかし、穏健な反体制派は、ISISによって代表されるアルカイダと戦っています。

WQ：イスラム戦線を穏健な反体制派の一部と考えていますか？

JW：イスラム戦線は、サラフィー主義運動の1つです。ですから、私達は、民主主義と多元的共存に関するシリア国民連合のビジョンに尽力するため、彼等と現地で戦っている大勢の人々に呼びかけているのです。すべての関係者がシ

リア社会の多元的共存を尊重することを期待しています。

WQ：イスラム戦線には、イスラム教のルールを確立するために戦っている数多くの人があります。アルヌスラ戦線は、イスラム戦線と一緒にISISと戦っていますが、アルカイダのイデオロギーを受け入れています。一方、自由シリア軍は影が薄くなってきています。穏健な反体制派は、どこにいますか？

JW：自由シリア軍は、まだ存続していますし、私達は、イギリス政府として、穏健な反体制派に対処しています。多元的共存と民主主義を尊重する反体制派がいなければ、政治的解決の可能性はありません。私達は、シリア国内でイスラム主義国家を樹立しようという試みは戦争の継続を導くことになるサラフィー主義運動にメッセージを送り、現政権には、反体制派を壊滅させるためにこの戦いを継続すると、シリアの破滅と分裂に至るとメッセージを送りました。つまり、反体制派の中の穏健派と現政権の間で合意を成立させて、国家と国内の制度を維持し、アルカイダに対して団結して対抗しなければならないのです。

WQ：このまま維持したい機関の1つに軍は含まれるのですか？

JW：私達は、すべての社会保障機関を維持したいと思っています。これらの機関は、1つの政党、一族、あるいは政権のための機関ではなく、国家機関として維持する必要があります。これは、現時点における議論の中心論点です。私達としては、変化が起こった後、あるいは移行期間の間に、国が混乱状態に陥らないことを強く望んでいるからです。2003年のイラクと同じシナリオを繰り返したくはないのです。これは、連合軍、自由シリア軍及び現体制の数多くの人々、さらに、関係者が共有している思いです。

これは、私達が足場としなければならない共通した考え方の1つです。ジュネーブでは、来週、これらの機関とそれぞれの権限をどのように保全するのか議論することになりますし、それを詳細に掘り下げるように働きかけます。

WQ：現体制と反体制派が国内制度を保護するための合意について話がありましたが、政権交代は、もう、求めてはいないということですか？

JW：ジュネーブIの原則によりますと、暫定統治機構は、両者の合意に基づいて設立されます。私達の立場は明確です。バッシュアール・アル・アサドの退陣なしに、政治的解決の可能性はありません。ただし、政治的プロセスについてだけでなく、国内の制度を維持する方法についても、詳細に議論しなければなりません。

WQ：シリアの結束を維持するメリットは何ですか？

JW：イギリスとその他の国々の利益です。シリアが分裂することがこの地域の国々、特にレバノンとヨルダンに与えるネガティブな影響を恐れているためです。人道状況の劣化も恐れています。イギリスは、主要援助国の1つです。人道援助に数10億ドルを提供していますし、現在の状況が今後何年も継続することは望んでいません。この地域と世界に過激思想が広がる危険性については、言うまでもありません。以上のような理由から、この戦争を終わらせたいのです。ジュネーブ会議で幅広い国際的支援を確認したのは、このような理由からです。

勿論、成果を上げるためには、3つのことが必要です。第1に、現政権及び反体制側から解決に至るための勇気ある取り組みがなければなりません。第2に、状況が困難かつ複雑ですから、創造的な解決策が必要です。第3に、ジュネーブIの原則を承認する国際的コンセンサスが必要です。



イランを除くと、これが正確な経緯です。私達は、これらの原則を受け入れ、この国際合意に参加する道を開くことを明言するようにイランに勧めています。イランが重要な関係国であることは、疑いがないからです。しかし、イランは、戦争の関係国なののでしょうか、それとも平和の関係国なののでしょうか？

WQ：サウジアラビアとトルコは、シリアに介入しています。武器を送り、シリアでの戦闘を奨励しています。何が違うのでしょうか？

JW：違いは、抗議運動が2011年に平和裏に始まったことです。現政権が暴力的な反応を示したため、革命が戦争になりました。シリア国民は、自分自身を守る権利があります。したがって、イランの役割とその他の国々の役割には、大きな違いがあります。彼等は、現政権を支持するのでしょうか、それとも反体制派を支持するのでしょうか？いずれにせよ、国際的コンセンサスが存在しますので、イランが、遅かれ早かれ、このプロセスに参加することを希望しています。

WQ：ダマスカスとはセキュリティコンタクトがありますか？

JW：現政権とは、どんなレベルでも、一切コンタクトはありません。それが、過激派に対するシールドとして役立つという主張は信じていません。現政権とイラクのアルカイダとの関係が古くからの関係であり、アルカイダの幹部の多くが、現在、ISISの幹部になっていることは知っています。イデオロギー的には、アルカイダと現政権の間には違いがありますが、事実上、誰がアルカイダと戦っているのですか？過去数ヶ月間は、自由シリア軍でした。

WQ：イスラム戦線は、テロリストのリストに載っているアルヌスラ戦線と同盟関係にありま

すが、ISISと戦っています。

JW：自由シリア軍は、イスラム戦線の一部と協力し、アルカイダと戦っています。すべての反体制派グループが過激派であり、テロリストであるという現政権の主張は間違っていますし、政治的解決の土台を蝕んでいます。現地には、複数の関係者が存在することを認めることが重要です。アルカイダがいますし、穏健な反体制派がいますし、現政権が存在します。クルド人（民主連合党（PYD））もいますし、彼等は、現政権に属するのか、あるいは反体制派に属するのか明確にしたがっています。私達の分析によると、彼等は現政権に近いと考えています。

政治的解決を望んでいる場合には、私達は、数多くのシリア国民の正当な要求を認識しなければなりません。ですから、ジュネーブに戻り、核心的問題を議論し、共通の利益、例えば、過激派に対する抵抗などに焦点を当てなければならぬのです。これも、シリア、地域及び世界の利益なのです。

WQ：解決策がどのようなものになるか、ビジョンはありますか？

JW：アサドは、過去3年間にシリアで起こったことを見れば、辞任しなければならないと思います。しかし、2003年のイラクのシナリオを繰り返さないようにするため、国内の制度は維持しなければなりません。この原則に基づいて妥協点を見出すことができます。シリア社会のすべての構成要素及び統治と国家制度に対する参加についても、保障が必要です。これらの考えは、これまでに具体化されてきています。私達は、解決策の概要については持ち合わせていますが、シリアの当事者が詳細に話し合いをするように仕向けなければなりません。明晰な解決策が必要ですが、交渉の中ですべての核心的問題に段階的に焦点を当てていきます。反体制派については、イスラム国家を強制するつもりは

ありません。シリア国民がそれを望んでいないことは明白です。状況を打開しなければなりません。ジュネーブで、それから、進行中の関係者同士の接触の中で、流れを変えなければなりません。

WQ：シリア危機の影響がレバノンに及ばないように努めているのですか？

JW：私達は、シリアの政治的解決を待っていますので、レバノンや、その他の近隣諸国を危機に導く影響を望んではいません。私達は、レバノン政府の公式な立場とシリア危機から乖離する政策に対するコミットメントを尊重しています。レバノンにせよ、その他の外国にせよ、この戦争に関与することは、絶対に正当化されません。

私達は、自国を安定させるためのレバノンとヨルダンの公式な立場を支持していますし、シリアの難民危機と難民に対する国境を越えた攻撃のネガティブな影響を認識しています。これらの2カ国については、開発プログラムと人道

援助プログラムを持っていますし、レバノンについては、レバノン軍が国境を守るのを支援するプログラムを持っています。

WQ：地域諸国に圧力を行使して、レバノンの関係者が協力し、政府を組織するように影響を与えていますか？

JW：シリア危機の影響とは別に、レバノンは、大きな課題に直面しており、政府を必要としています。そのため、私達は、すべての関係者にできるだけ早く合意に基づいて政府を組織し、国が直面している問題に対処することを勧めています。地域的及び国際的な障害はありましたが、今はもうなくなっています。レバノン国内の対話が必要であり、万事うまくいけば、政府はすぐにも組織されるでしょう。

WQ：ヒズボラは、含まれますか？

JW：勿論です。ヒズボラは、レバノンの政治勢力の一部です。